

今日は、「狼」についての話をします。こちらを見てください。狼の付く字で「狼煙」という熟語があります。これは「のろし」と読みます。「のろし」は煙を使って送る合図のこと。狼の糞を木やわらと一緒に燃やすと風が吹いても煙がまっすぐに上がるので、遠くからでも見やすいそうです。ですから、「狼」の糞を燃やした「煙」で「のろし」と読みます。この熟語は割と有名なので、読める人がいるのでは。次は「狼れる」。これは大人でも読むのが難しい字です。狼は草むらで寝るときに、猫がゴロニヤーンと背中転げ回るように、寝転がってあたりの草を押しつぶし、グシャグシャにするようです。その様子からか、「みだれる」と読みます。

昔話に出て来る妖怪で、「送り狼」というのがいます。人が山道などを歩いていると、ヒタヒタと後ろをつけて来る。あるいは頭の上を飛び越したりする。そこでびっくりして転んだりすると食い殺されてしまうが、「送り狼」に逆らわず、転ばずに家まで着くと、スツと消えるという妖怪のようです。

「送り狼」が後ろからつけているため、かえってイノシシやクマなどの他の獣が近づかないので、無事に家に到着できるといふこと、家に着いた時、お礼としておにぎりと、わらじの片方を差し出すと、おにぎりを食べ、わらじをくわえて、去っていくのだそうです。

この妖怪「送り狼」の話は、本物の狼の習性にピタリと当てはまるようです。狼は群れで生活していて、自分の縄張りに入ってきた人間がいると、見張り続け、自分の縄張りから出る所までつけてくるのだそうです。人間が自分の縄張りから出てしまうと、スツと消える。逆に人間が狼におびえて、逃げたり転んだり、急な動きをするとガブツとかみつく。この狼の習性から妖怪「送り狼」は生まれたようです。



日本でも昔、狼が生息していましたが、一九〇五（明治三十八）年の今日、一月二十三日、奈良県の鷲家口（わかぐち）という所で捕まえられた狼を最後に、ニホンオオカミが日本からいなくなったと言われています。今から百十八年前の今日、イギリスの貴族ベッドフォード公からの依頼で、日本に動物の調査に来ていたアメリカ人マルコム・アンダーソンさんと、学生で通訳の金井さん、猟師の石黒さんの所に地元の猟師三名が、ニホンオオカミの死体を運んできました。猟師さんたちは、このニホンオオカミの死体を、アンダーソンさんに十数万円、当時の一円は今の二万円くらいなので、二十万円以上で売ろうとしたようです。金井さんは「それは高すぎるとしたようです。」と主張しましたが、交

渉決裂。二人の猟師は帰って行ったそうです。アンダーソンさんは、がっかり。気の毒なほどしよげかえっていたようです。が、その日うちに猟師さんたちは戻って来て、結局アンダーソンさんは八円五十銭（約十八万円）でニホンオオカミを買うことができました。

この狼は、運ばれてきたときにお腹の辺りが青く変色し始めていて、腐りかけていました。ですから、ニホンオオカミが最後に捕まえたのは、正確に言うると、一月二十三日の数日前のようです。それと、五年後の一九一〇年に福井県でニホンオオカミが見つかり、写真に撮られ、はく製にされましたが、空襲ではく製が燃えてしまいました。そのため証拠が残っていないということで、ニホンオオカミの絶滅の日は、一応、一九〇五年の一月二十三日ということになっています。

ちなみにアンダーソンさんが手に入れたニホンオオカミの毛皮と頭の骨は、イギリスの大英博物館からロンドンの自然史博物館に渡り、今でも大切に保存されているようです。

もう一つ、この護符を見てください。護符というのは願いを込めたお守り札のことです。この護符には、武蔵野國とか御嶽山という字と、なんだか動物が描かれていますね。今日はここまで。次回はこの護符の話から、狼に関する続きの話したいと思います。

（立教小学校校長 田代 正行）